のっぽ君と青い鳥

ポルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
のっぽ君と青い鳥

【Ｎコード】
Ｎ７４６３Ｎ

【作者名】
ポルナ

【あらすじ】
春。

ぽかぽか陽気の中でひとり平和に過ごす昼休みに、

その青い鳥はやってきました。

ある中学生と、青い小鳥のおはなし。

ほのぼの日常です。
（ちょっとファンタジーを含みます）

1．春也と小鳥（前書き）

主人公　　北村春也（きたむらはるや）

身長　１８２

体重　６８ｋｇ

ちょっとぬけているところがあって、よくぼーっとしている中学３年生。

所属している部活動は身長をいかし…きれてない美術部。

無表情で何を考えているか分からないことが多い。

1．春也と小鳥

昼休み。

春也は春のぽかぽかした陽気の中、
ただぼーーーーーっとしていた。

「いい天気だな～…」

教室の近くにある体育館からはダムダムとバスケットボールをつく
音や、遊ぶ生徒の声が聞こえている。

広い教室には窓際の席にひとり座っている春也と、
廊下側でおしゃべりをしている4、5人の女子しかいない。

あとは皆体育館で遊んでいるのだろう。

春也は体を動かすのは嫌いではないが、こうしてひとりで教室でのんびりしている方が好きだった。

春也は、人とあまり話すことがない。

といっても無愛想なわけではないし、友達がいないわけでもない。

それでも会話の回数がほとんどないのは、

単に春也が「目立たない」からだ。

身長１８２センチというのっぽのくせに、彼は存在感がうすい。

話しかけられれば受け答えするが
自分から話しかけることはしないので、
結果「空気」と化してしまうのだ。

しかし春也はそれで良かった。

刺激がなくても平和であればそれで満足。

春也はそんなやつだ。

ぽかぽかとした陽気のあまりの気持ちの良さに、
春也がうとうとしだしたその時。

『ドン！！』

「「キャッ！？」」

…何かが窓にぶつかる音。

おしゃべりしていた女子達はいきなりのその音に驚く。

しかし春也は……

「ん？なんだ！？」

鈍かった。

「何だろ？」

春也は窓に当たったものを確かめるためベランダに出た。

『ガラッ』

みると、そこには……

『バタバタバタバタッ！』

「……鳥？」

羽をバタバタさせながらベランダを這いずり回っている、青い小鳥がいた。

『バタバタバタッ……』

窓に頭からぶつかってしまい、何が起こったのか分からないのだろうか。

とにかく見ていられなかった春也は、
手で優しく包み込むように小鳥を拾い上げた。

「―うわ、ちぃせぇ」

それはとても小さくて、大きな春也の手の中にすっぽり入ってしまう。

『バタバタッ！』

「おい、落ち着け、おちつけって」

教室の窓からは女子達が春也と小鳥の様子を見ていた。

『バタッ！』

「大丈夫だから、だいじょうぶだから……」

春也は、言っても通じないことが分かっていながら、
手の中で暴れる鳥に優しく「大丈夫」と言い続けた。

……しばらくすると、小鳥はおとなしくなった。

春也の手から逃げようともせず、ただじっとしている。

「ふぅ―…、さてと……」

春也はこいつをこれからどうしようか考えた。

1. すぐ逃がす

2. ケガをしているとまずいので様子を見る

3. 友達になる

春也だから思いつく3。

春也は3がいいと思った。

しかしこの小鳥にも心配している親がいるはず。

だとしたら1……

いやしかし今逃がしても他の動物に食べられるだけかもしれない。

「2しかないな……」

空を見上げ呟く春也。

女子達は「何が！？」と思った。

とりあえず教室に入り、ケガをしていないか確かめることにした春也。

机にハンカチを折りたたんで、その上に小鳥を寝かせる。

その時もほとんど動かなかった。

「んーと……あっ」

小鳥の右足をよく見ると、本来曲がらないはずの方向に曲がっていた。

「……これは手術が必要だな。」

なぜか楽しそうというか明らかにテンションが上がっている春也。

春也は小鳥をおいて小走りで教室を出て、保健室に向かった。

『ガラッ』

「あら、どうしたの？突き指でもした？」

保健室の先生は春也がバスケでケガをしたのかと思ったようだ。

「包帯、借りていきます」

春也は棚の上にあった細めの包帯を手に取る。

「え、持っていくの！？巻いてあげるわよ？」

「いえ、大丈夫です。……緊急患者がいるので失礼します」

いつもの無表情でそう言い残して、春也は保健室をでていった。

「……緊急患者？」

先生は春也が出ていった戸を見ながら首をかしげる。

「……小鳥か、野うさぎか、そこらへんかしらね」

先生には簡単に予想できたようだ。

春也は分かりやすい奴なのか。

「…オペを始めます。」

手術の内容はこうだ。

小鳥の曲がった足をまっすぐにする。
←
添え木（ただの木の枝）を添える。
←
包帯を巻く。

簡単そうに思えるが、小鳥の小さく細い足に包帯を巻くのは容易ではない。

しかしさすがは美術部。

器用な手つきできれいに巻いていき、手術はすぐに終わった。

その様子を女子達がそばで見ていたのにもかかわらず、春也は気づいていなかった。

「春也くん、優しいんだね。」

「可愛いね、その小鳥。」

「さすが器用だね～」

「……ん？」

やっと気づいた春也。

というか座っていてもほぼ目線は同じなのに。

春也が話しかけられたのは久しぶりだった。

「あー、うん」

「ねぇ、その鳥飼うの？」

「ん―…。いや、ちゃんと飛べるようになるまで面倒みて、それから逃がすよ。」

「そうなんだ～」

『キーンコーンカーンコーン…』

昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴る。

「あっ、次体育じゃん。」

「そうだった！」

「じゃ、またね。春也くん」

女子達は着替えの体操着をもって教室を出て行った。

体育館で遊んでいる人達はすでに体操着に着替えている。

よって春也は一人で着替える。

小鳥はいまだにじっと動かず、ただ春也を見ていた。

“腹減ったのかな？”

春也は思った。

しかし小鳥の餌になるようなものはなにもない。

「困ったな……」

春也は悩むが、案が思いつかない。

「あっ、時間がない」

もう体育が始まってしまう。

「おとなしく待ってろよ。なんとか食べ物見つけてくるから」

春也はしかたなく小鳥をおいて教室をでた。

残された小鳥は動かないまま春也が出ていった扉を見ていた。

タッタッタッタッタ……

今日の体育はマラソン大会の練習。

マラソンコースを試しにゆっくり走るだけの、暇な授業だ。

しかし、春也の中学は山の中にあるので、周りの道路はかなりアップダウンが激しい。

普段運動不足の文化部の生徒はジョギングするだけでつらそうだ。

春也も美術部だが、彼は例外のようで、急な坂も表情ひとつ変えることなく走っている。

そもそも春也がその無表情は、全力疾走している時も変わらない。

２０メートルシャトルランで１００回おり返した時も変わらない。

何を考えているか分からないやつなのだ。

しかし、今は春也が何を考えているかは簡単に分かるだろう。

「何かないか、何か……」

春也はコースの草むらをじっと見ながら走っていた。

これは虫とかなにか小鳥のエサになるものを探そうと考えているのだろう。

授業の終わりに整列したときに、
春也の後ろの人が春也の手の中にミミズ（まだ生きてる）がたくさんいたことに驚いたのは言うまでもない。

そして、教室に戻ってきた生徒たちが

春也の机の上にちょこんとすわっている青い小鳥をみて驚いたことも言うまでもないだろう。

春也は集まる視線に気をかけず（というか気付かず）、とってきた小さいミミズを小鳥に食べさせた。

……この時の春也の頭の中。

『もし食用のニワトリがミミズ食べてたら人間は間接的にミミズ食べてることになるんだよなぁ』

やはり何を考えているか分からない春也。

午後の授業中も小鳥はじっとしていたので、先生に気付かれることはなかった。
（周りの生徒はかなり見ていたが）

春也は部活にいくための準備をした。

「お前も美術室に連れて行ってやろうなぁ」

小鳥を自分の肩にちょこんとおいて、春也は教室を出ていった。

2．名前はナク

放課後、多くの帰る人や着替えて部活へといく人の中、
春也は小鳥を肩にのせてのんびり歩いている。

美術室のある一階に降りたところで、
春也は廊下の奥から女の子が車椅子を進めてくるのを見かけた。

見ると、上履きの紐の色は青。

二年生の学年色だ。

春也は女の子とすれ違う時、

ものすごく落ち込んだ、暗い顔をしていたことには気付かなかった。

女の子のほうも下を向いたままで、でかい春也の存在にも気付いてない様子で、

そのまま玄関へと車椅子をすすめた。

……しかし、小鳥だけはそれを春也の肩の上からずっと見つめてていた。

春也は美術室に着いた。

「よし、今日はおまえを描いてやろうな」

今日の部活ではこの小鳥を描くことにした春也。

道具を準備して、さっそく下書きをはじめた。

ところで、今は一年生の仮入部期間中なのだが、まだ美術部には一

人も来ていない。

部員は春也ひとりなので、もし今年一人も入らなければ廃部になってしまうため、

本当は焦るべきところなのだろうが、
春也は勧誘せずにのんきに絵を描いている。

「なんとかなるだろ」と思っているのだ。

「カッコよく描いてやるからな～」

……大丈夫なのだろうか。

下書きが終わる頃、春也はあることに気づいた。

「そういえば、なまえを決めてなかったな」

春也は絵を描くのを中断し、メモ用紙をもって考えはじめた。

「えっと…『エクセル』、『ブルターニュ』、『ネクサス』、『プレセア』、『リスペクト』、『エッフェル』、『ファイナル』……」

つぶやきながら名前をどんどん書き出していく春也。

というか、響きのいい英語を並べただけ。

センスはゼロだった。

「よし、こんなものかな。……どれがいい？」

紙を小鳥に見せる春也。

全力で首を振る小鳥。

「ん？全部ダメなのか？」

「うーん…」とまた考え直す春也。

小鳥は不安そうに見守っていた。

（数分後）

「そういえば…」

と、この鳥がめずらしいことに
一回も鳴いていないことに気づいた春也。

それはこの小鳥の一番の特徴とも言えるだろう。

「鳴かない…鳴くことがない…鳴くことなし……それだ！」

ガタッ！と立ち上がり、
ビシッ！と小鳥を指差す。

「おまえの名前は、『ナクナシ』にけってい！」

「…ピィー！」

「……」

こうして小鳥の名前は

『ナク』に決まった！

……名前が決まったところで春也はナクの絵を再開し、下校の時間まで描き続けた。

下校時間が迫ってきたので、

春也は片付けをし、消灯して美術室をあとにした。

画板の上には完成したナクの絵が残っている。

春也は毎年コンクールで賞をとるほどの腕前だ。

水彩でさっと描かれたものだったが、
その絵の出来栄えも素晴らしく、ナクの色鮮やかな毛色が綺麗に表現されている。

春也はまたナクを肩にのせて、うす暗くなり始めた山道を自転車で下っていった。

春也の家族（※人物紹介）（前書き）

次の話を読んでからみるのもいいと思います。

春也の家族（※人物紹介）

北村秋子（きたむらあきこ）

春也の母親。

春也と同じくおっとり、のんびりとした性格。

少し天然で、おっちょこちょいなところがある。（その日の給食と同じ料理を作っちゃったり）

職業は小学校の先生。

冬美、春也、夏実をそれぞれ「ふゆちゃん」「はるちゃん」「なっちゃん」とよび、彼らがいくつになっても溺愛している。

料理が得意。（とくにカレー）

（容姿）

身長は春也と違って普通で、１６０?くらい。

３７歳だが、年齢より若々しく冬美と並べば姉妹に見えるほど。

髪型はウェーブのかかったロング。

―――――――――――――――

北村冬美（きたむらふゆみ）

春也の姉で、高校２年生。

おとなしく無口だが、家族思いでしっかり者。

読書が大好きで、いつも何かしらの本（ジャンル問わず）を読んでいる。

かなりの近眼で、メガネをかけている。

勉強は得意。

所属する部活はブラスバンド部で、楽器はアルトサックス。

あとちょっぴりオカルトマニア。

（容姿）

身長は１６５？とやや高めで、スラッとした細身の体型。

鼻や輪郭が整っていて、大人びた顔立ちをしている。

が、くりっとしている可愛らしい目をしていることはメガネ（なぜか丸ぶち）を外した時にしか分からない。

―――――――――――――

北村夏実（きたむらなつみ）

春也の妹で中学1年生。

明るく、人懐っこい性格。

母と同じく天然だが、ツッコミ役になることも多い。

勉強は苦手で春也や冬美によく教えてもらっている。

部活は陸上（に入る予定）

趣味は自分で作詞作曲してギターを弾いて歌うこと。
歌とギターは上手だが歌詞は意味不明なものがほとんど。

（容姿）

身長は１４０？と低く、
少しそれに対するコンプレックスをいだいている。

顔立ちは可愛らしく、笑顔がよく似合う。

髪型はショートヘア。

人に甘える姿や笑っている姿には、小動物を思わせる可愛らしさがある。

3．新しい家族

春也は登校時は登りで２０分かかるが、
下校時は楽なもので、行きの半分もかからずに家につく。

「ここがおれの家だぞ、ナク」

自転車を車庫のわきにとめ、玄関に入る。

『ガラッ』

「ただいま―」

「あ、おかえり―はる兄」
「はるちゃんおかえり―」

妹の夏実と
母の秋子がエプロン姿で台所から顔を出す。
ちょうど夕飯を作っているところのようだ。

「ん、今日はカレーか」

「そうよ―」

秋子が鍋をかき混ぜながら答える。

ちなみに今日の春也の給食はカレーだった。

冷蔵庫にはってある献立にも書いてある。

でも春也は『給食のカレーとうちのカレーは違うから』と、全然気にしてないようだ。

「はる……その鳥…どうしたの……？」

ソファーで読書をしていた姉の冬美が、ナクに気づき、尋ねてきた。

「あ、姉さんただいま」

「おかえりなさい」

「あら、可愛い小鳥ね」

「どっかで拾ってきたの？」

秋子と夏実もカレーの盛り付けをしながら聞いてきた。

「その話なんだけど…」

「じゃあもうご飯食べれるから食べながら聞きましょ」

一家は準備ができたところでそれぞれの椅子に座った。

「「いただきまーす」」

「…いただきます」

「おかわりいっぱいあるからねー」

「もぐもぐ……で、こいつの話なんだけど…」

春也は肩にナクを乗せたまま話しはじめた。

――――――――――――――

「――というわけなのです……もぐもぐ」

今日のことを3人に話し終えた春也

の口の周りにはカレーつきまくり。

「じゃあはるちゃん、そのこがちゃんと飛べるようになるまで家で面倒みてあげるわけね？」

「うん」

「あ、ところで今日のカレー、どう？」

「うん、最高」

「『さいこう』だなんて！お母さんうれしい！」

「…そのやりとり、毎日やってて飽きない？」

「ねぇねぇはるにぃ、私達が学校いってる間はどうするの？誰も見てられないのはまずいっしょ。」

「いや、学校連れてくけど？」

「ナニその『当たり前じゃん』みたいなの！？」

「……カゴはわたしが明日、帰りに買ってくる…」

「さすがふゆちゃん、お姉ちゃんね―」

（※誰がどのセリフを言っているか想像しよう！）

『ガチャガチャ…』

夕食を食べ終わり、
一家は片付け、洗い物をしている。

『ジャーーー』

秋「あ、はるちゃん洗い物拭いてってちょうだい」

春「はいよ」

夏「はる兄これも―」

春「はいよ」

冬「……なるほど、爪を押しながらの暗記は頭に残る……と…」

『ペラッ』

秋「あ、洗剤もうないわ。はるちゃん後で買ってきてちょうだい」

春「はいよ」

夏「はる兄ついでにジャソプも―」

春「はいよ」

冬「…ホログラフィックで自分の位置をしる…」

『ペラッ』

秋「あっ、お皿かけちゃった。はるちゃん袋もってきてちょうだい」

春「はいよ」

夏「はる兄ゴキブリ出た―」

春「はいよ」

冬「…目標、スピード、人脈が夢を叶えることにおける要素…」

『ペラッ』

（※誰がなにをしているかは想像しよう！）

――――――――――――――――

片付けも終わり、居間でくつろぐ一家（春也以外）。

『ガラッ』

「ただいま」

春也がおつかいを終えて帰ってきた。

相変わらずナクはその肩にちょこんと乗っている。

「おかえりーはるちゃん。洗剤ありがとね」

「台所おいとくから……っと、夏実。はいジャソプ」

「わーいありがとう！」

「……」『ペラッ』

夏実は春也の買ってきたマンガを、

秋子は料理の本を、

冬美は小説をそれぞれ読みながらくつろいでいる。

「あ、はる兄さきにお風呂入ってきて！ナクのことわたしが見てるから」

「ん、わかった。」

春也はナクを手にのせ、夏実に渡した。

「ふふ、いいこね。」

夏実は春也と同じように肩にナクをのせると、

指2本でその小さい頭を撫でながらニコニコ見つめている。

「ホント、おとなしいんだね、ナクって」

「そうだな。……じゃ、たのんだぞ―」

「あ、今日新しい曲できたんだ！後で聞きにきてね！」

「りょうかい」

「あら、お母さんも聞きたいわ」

「……私もいく…」

北村家はみな性格は違えども、とても仲がいい。

……そんな家族に、今日新しい一員がふえた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7463n/

のっぽ君と青い鳥

2010年10月9日13時17分発行